小学校英語教育におけるティーチャートークの研究
－　意図的で構造化されたインプットを身に付けるための研修用コンテンツの開発　－

学籍番号　209113
氏　　名　古賀真也
主指導教員　佐々木靖

1.　研究の背景と問題の所在

本研究の目的は、小学校外国語科において英語のインプットが十分でない状態で児童に発話を求めてしまう問題が指摘されているため、その質を高める手段としてティーチャートーク（構造化されたインプット）VanPatten(1996,2004)に着目し、教師が外国語の学習者に向けて発するティーチャートークを調整できるようにすることである。構造化されたインプットとは特定の言語形式に着目させるように意図的に聞かせるインプットのことである。筆者は、池田市の小学校外国語科専科教員等の研修を担当しており、そのため、研修用コンテンツを開発し、それを用いて教員研修を行い小学校外国語科（小学校英語）の授業におけるインプットの質を高めていく。

2. 先行研究

ティーチャートークとはコミュニケーションを円滑にするために言語の形式や機能を最適化することである。これまでにも、ティーチャートークの特徴が研究され類型がまとめられてきた。ティーチャートークの取り組みを進めるにあたって渡邉ら（1995）が提唱したMERRIER Approachを援用した。MERRIER Approachは「1 言語外情報」「2 具体例」「3 言い換え」「4 繰り返し」「5 やりとり」「6 付け足し」「7 褒める」の7つの指針から成り立っている。

3. コンテンツの開発と研修

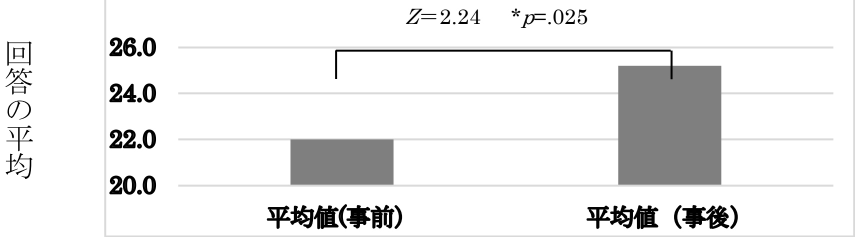
研修用コンテンツを開発し、それを用いて教員研修を3回行い（N＝16）質問紙調査（4件法）を実施して、その効果検証を行ない、研修用コンテンツの有効性を検証するとともに研修のあり方を考察した。令和2年度には、筆者がティーチャートークを取り入れた授業作りを行い、その動画を撮影した。また、ティーチャートークを解説するためのスライド、ルーブリック、Can Doリストなどを作成した。続いて教師それぞれが、実践動画を作成して、持ち寄った。

図 1　研修用コンテンツ

4.　研修の効果検証と分析

MERRIER Approach による質問紙調査（全部で 7 項目）を用いて、研修の有効性を検証した。事前質問紙では「2 具体例」や「3 言い換え」の項目における回答の平均が比較的低かった。また、回答の合計と教職経験年数には正の相関関係が見られ、特に 5 年未満の教員における自己肯定感が低かった。事前事後の変容について統計を用いて検定を行ったところ、「1 言語外情報」、「2 具体例」、「3 言い換え」、「合計」において有意な差が見られた。事前と事後のそれぞれで質問紙回答の合計と教職経験年数の相関係数を調査したところ、事前に比べ、事後における相関関係が低くなっていた。つまり、教職経験年数による差が縮まったということが言える。ディスコース分析（教師と児童のやりとりを記録したもの）では、「2 具体例」や「3 言い換え」「6 付け足し」の出現率が低いことが明らかになった。自由記述（3 回）では、MERRIER Approach を拠り所として自己省察や自己修正をするような記述が多く見られた。3 回目においては、筆者が特に介入し、「2 具体例」や「3 言い換え」について、実際に使用される場面をスライドで提示し、教員自身が検討する研修を行なった。重点的な研修を行なったことが自己効力感の向上につながったと考えられる。

図 2　質問紙の事前と事後における合計の平均(4 件法)



5. 結論

本研究を通して、教師が外国語の学習者に向けて発するティーチャートークを調整できるようにすることは可能であることが検証された。特に、MERRIER Approach を省察のツールに用いたことによって、教員が自己調整を行うことにつながったと考えられる。また、研修のあり方では、伝達的な研修に比べ、教員自らがティーチャートークの実践動画を持ち寄って対話的に検討することは、研修内容の定着に有効であった。